長野県短期大学紀要　第67号　2012年
Journal of Nagano Prefectural College, No. 67, 2012

【資料】

Book of the Falconry that the Suwa Clan who Lived in Kyoto Owned
- Whole Sentence Introduction of "*Takakikigakisyousyou*" of the Tenri Central Library Possession -

Yasuko NIHONMATSU

京都諏訪氏の鷹書
―天理大学附属天理図書館蔵『鷹聞書少々』全文翻刻―

二本松　泰子

はじめに

明応五年（一四九六）の奥書を持つ天理大学附属天理図書館蔵『鷹聞書少々』（請求記号七八七　イ七）は、その奥書によれば京都諏訪氏の一族である諏訪貞通が制作に携わったテキストである。京都諏訪氏については、その初代である円忠が『諏訪大明神画詞』の制作者であることがよく知られている他、同一族が代々室町幕府奉行人を世襲して足利政権下で活躍した具体的な事跡について、村石正行氏(1)や石井裕一朗氏(2)などによる詳しい論考がある。なお、尊経閣文庫蔵『神氏系図』(3)によると、その系譜は以下の通りである。

円忠　公人奉行号惣奉行　評定衆　引付衆　常社執行　法橋法眼　道号貞叟　諏方大進　大円為猶子　等持院殿征夷大将軍之始仰嵯峨開山夢窓正覚国師自信州被召上之為右筆方衆異他奉公之次第別記在之諸国諸庄園為奉公之賞拝領之地数十ヶ所在帯数通之　御下文公家一統之時者為記録所　禰津神平貞直鷹道一流文書并諏方郡大塩御牧等相伝之　延文比　当社縁起絵寄人　暦応二将軍家奉　勅建天竜寺始末為奉行　令発願　今上皇帝後光厳院忝下外題之宸翰　征夷大将軍記全部奥書親王臺司貴種卿士或録其儀趣或書其詞章家督相伝之　将軍家或時指庭下信濃桜有御発句円忠令続之在別菟玖波集作者　新千載新後拾遺集等作者　――康嗣　次郎　童名松夫丸　鹿苑院殿御字被下之守入道法名信格　道号物元　引付衆　文和四十二　二十四　自江州至京都令供奉軍忠神妙之旨将軍家　寶篋院殿　御感状在之新恩地等拝領――満嗣　左衛門　三郎　母康嗣女　吉良殿妻　実者康嗣孫為猶子　家督相続之　大祝頼嗣猶子護与諏方郡大塩御牧内福沢村　――行信　童名松菊丸　始忠嗣　母神祇伯家女　次郎　左衛門尉　法名常信　道号心元――光信　新恩地等拝領　評定衆　引付衆　信濃守　左近将監以下　法名祐貞　道号松雲　母山徒円明女　改号忠政亦忠卿　懇照院殿御代於御前被鷹仕下給御次郎　童名松名丸　母同徒円明女　改号忠政亦忠卿　懇照院殿御代於御前被鷹仕下給御剣　鷹事雖為天下御禁制於当家如先々　贊鷹可繋旨蒙　上命矣　法名信功　道号徳林――貞通　貞通従五位上　従五位下　引付衆信濃守左近将監　次郎　童名松千代丸　始―卿　母藤原氏　政所執事代　新恩地等拝領――長直　若狭守　右衛門尉　弥次郎　童名松代丸　母同貞通　大和入道宗泉猶子　政所寄人

これによると、天理大学附属天理図書館蔵『鷹聞書少々』の制作に関わったとされる貞通は円忠の六代末裔に当る。

ところで、一六世紀頃に成立した『蒙求臂鷹往来』(4)「臘月三日付修理権大夫某　浄上　備中前司歟」には、以下のような貞通の鷹書についての紹介が見える。

貞通伝書者。或記法度々髄脳相形之精究。或録調養之奇術。医療之捷経。又挙古来多説之昌。詳諸家所用之区。又攢義理幽微之事。示難解玄妙之秘。其外至條々之本説。諸事之濫觴。態芸之委曲。毎物之真贋。故実之細碎等盡載之。直所見先達不傳之極意也。是則貞直淵底。神家握玩書也。

これによると、「貞通伝書」は「神家握翫書」と評されている。神氏は信州・諏訪大社の大祝家の本姓であり、諏訪を信奉する武士たちは大祝家に倣って神の姓を称したことで知られる。さらに、『蒙求臂鷹往来』「前備中守某謹上匠作尹」には

次此道事。於神平貞直流者。諏方相伝為勿論哉。至家流者。以何人為其家。以如何書可弁明正説候哉。

と見える。これによると「此道」（鷹道）には「神平貞直流」と「家流」があるという。このうち、「神平貞直流」は諏訪氏が相伝している由を伝えるが、それに対して「家流」は未詳とされる。「神平貞直」は『諏訪大明神画詞』で「東国無双の鷹飼」と評される「禰津神平貞直」のことである。さらに、『蒙求臂鷹往来』「十二月三日付修理権大夫某　浄上　備中前司歟」にも

次当道事。如賢意。於神平流者。在洛諏方的々相承勿論也。而神家爪葛末葉之輩。号貞直余胤。披失錯書。委説功能。為師範之類多之歟。

とある。これによると、「当道」（鷹道）のこととして、「神平流」については京都の諏訪氏が相承していると説明する。この「神平」はいうまでもなく「禰津神平貞直」のことであろう。その一方で、神家の末葉が禰津貞直の子孫を称し、「失錯書」を披露して師範となるものが多いという。「神家」とは諏訪社所縁の氏族のことであり、当時の京都にはこの一族の分家が相当数、居していたらしい。その中で諏訪を称しつつ誤った鷹書を披瀝するものたちがいたと記されているのである。そうした状況の中で、

諏訪大祝家の一族として京都に拠点を持った京都諏訪氏の鷹書は諏訪の鷹術の正統として重要な位置付けを得ていたことがうかがえよう。それならば、同一族の貞通の鷹書は神家すなわち諏訪流の正統な流れを汲むテキストとして重要視されていたことが予想されよう。

そこで本稿では、諏訪貞通が関与した天理大学附属天理図書館蔵『鷹聞書少々』の全文を翻刻紹介する(5)。このような京都諏訪氏が関わったテキストを紹介することによって、同氏が鷹書の制作を通じて京都における新しい権威（宗家の諏訪大祝家を凌ぐ）の確立を目指した経緯を明らかにする一手立てとしたい。それは大意において、中世期に膨大に制作された鷹書類の果たした役割を解明する一端となることも同時に期するものである。

なお、当該書の書誌は以下のとおり。

【所蔵】天理大学附属天理図書館。請求記号七八七　イ七。【外題】無し。【内題】巻首題「鷹聞書少々」（一丁表）。【目録】無し。【巻数】一巻。【丁数】二三丁。【行数】半葉一一行無罫。漢字平仮名交じり文。【寸法】縦22糎×横18.5糎。【奥書】「明應五年丙辰壬二月吉日　前信濃守神貞通／其預安藝守鑑員／法名鉄叟道牛（花押）／同藤吉良／統綱（花押）」（二三丁表）【蔵書印等】一丁表に「天理圖書館蔵」の蔵書印。

【注】

(1) 村石正行氏「室町幕府奉行人諏訪氏の基礎的考察」（「長野県立歴史館 研究紀要」第11号、2005年3月）。

(2) 石井裕一朗氏「中世後期京都における諏訪氏と諏訪信仰―『諏訪大明神絵詞の再検討―』」（「武蔵大学人文学会雑誌」第41巻第2号、2010年1月）。

(3) 『諏訪史 第2巻 前編』「附録」（信濃教育会諏訪部会編、信濃教育会諏訪部会刊行、一九三一年二月。）

(4) 『続群書類従第13輯下』所収。

(5) なお、(1)(2)以外で諏訪貞通について触れている先学の研究は、たとえば、井上宗雄氏『中世歌壇史の研究　室町前期』（風間書房、1961年12月初版、1974年6月改訂版）が京都諏訪社で法楽和歌を行った人物であることを紹介している他、山本一氏が「鷹歌をめぐる二、三の考察」（『日本文学史論―島津忠夫先生古稀記念論集―』世界思想社、1997年9月所収）、「名古屋市蓬左文庫蔵『鷹百首和歌』（解題・翻刻）」（『王朝文学の本質と変容 韻文編』和泉書院、2001年11月所収）で名古屋市蓬左文庫蔵『鷹百首和歌（たかやまに類）』（目録番号129・61・14）の奥書に諏訪貞通の署名が見えることについて言及している。また、天理大学附属天理図書館蔵『鷹聞書少々』の異本については、宮内庁書陵部蔵『鷹聞書　諏訪家傳　完』（函号一六三－一〇六一）がある。ただし、当該書は奥書が無いため、制作事情や伝来については不明。さらに、天理大学附属天理図書館蔵『鷹聞書少々』以外に、管見において確認できた諏訪貞通が関わった鷹書としては、永青文庫蔵『和傳鷹経 上下』（資料番号3－3－44）がある。上掲二書の書誌は以下の通り。

○宮内庁書陵部蔵『鷹聞書　諏訪家傳　完』書誌

【所蔵】宮内庁書陵部。函号一六三－一〇六一。【外題】表紙左上に「鷹聞書　諏方家傳　完」と記す貼題簽。縦14糎×横3糎。【内題】巻首題「鷹聞書少々」（一丁表）。【寸法】縦23.5糎×横17.5糎。【目録】無し。【巻数】一巻。【丁数】三九丁。【行数】半葉九行無罫。漢字平仮名交じり文。【奥書】無し。【蔵書印等】一丁表に「宮内省圖書印」の蔵書印。また巻末に「昭和3年12月伯爵松平直亮寄贈」の受け入れ印。【備考】天理大学附属天理図書館蔵『鷹聞書少々』とほぼ同内容であるが、増補記事有り。

○永青文庫蔵『和傳鷹経 上下』書誌

【所蔵】永青文庫。資料番号3－3－44。【外題】表紙左上にウチツケ書きで「和傳鷹経 上下」。【内題】「和傳鷹経上」（一丁表）。「和傳鷹経下」（三七丁表）【寸法】縦26.0糎×横18.5糎。【装幀】袋綴じ。【目録】上巻の目録は一丁表～三丁裏に記載。下巻の目録は三七丁表～三七裏に記載。【巻数】一巻。【丁数】五五丁。【行数】

半葉一一行無罫。漢字平仮名交じり文。【奥書】上巻の奥書に「右鷹書依 上意所令書写進上之如斯／明應五年丙辰閏二月日／前信濃守神貞通奉」（三五丁裏）。下巻の奥書に「右鷹書依 上意所令書写進上之如斯／明應五年丙辰閏二月日／前信濃守神貞通奉」（五三丁裏）「宝暦十一年辛巳 以宇土之書寫之」。（五四丁表）【蔵書印等】一丁表、五三丁裏、五四丁表に蔵書印有り。

【凡例】

一 翻刻は天理大学附属天理図書館蔵『鷹聞書少々』（請求記号七八七 イ七）によった。

一 翻刻番号は天理大学附属天理図書館本翻刻第1124号。

一 翻刻に関しては、できるかぎり原文に忠実になるようにつとめ、改行は原本に従った。

一 明らかな誤字や脱字などと思われる箇所はそのまま翻刻し、傍らに（ママ）をつけた。

一 改丁は」をもって示し、（一オ）のように丁数ならびに表裏を示した。

一 字体は出来るだけ底本の表記を重んじるように心がけたが、異体字など一部通行の字体に改めたところもある。

一 花押は（花押）とし、その形態は示さなかった。

一 朱筆による書き入れ（主に傍書）と朱引きについては適宜記載し、（朱）と示した。ただし、返り点と濁点表記については、墨書・朱筆の区別をしていない。

一 朱筆による合点、○などの記号、句読点、中黒は省略した。

【本文】

鷹聞書少々

一 箸鷹と云ハ鷹の惣名なり大鷹鴟にかきる
へからす小鷹なとをも箸鷹と云也其故ははし
国より渡り始たるニよりて箸鷹ト云説あ□(リカ)又或
説に四月八日ニ鳥屋ニ入レ七月十四日にしやうりやうの
の箸を續松(タイマツ)にして鳥屋ヲ出スニヨリ箸鷹ト云説アリ
鷹請取渡シの事渡候時ハ先餌ヲ後(ウシロ)ノ右脇
にはせて付さて鷹をいつものことく手にすへ鞭を
前へよこさまに置右のひさをたて右のひさをつ
きてすへへしさて請取人の前へ来候時右ノ手
にて餌袋の緒をとき餌袋を我か前ニ置緒」一オ
を取て鳥頸のつぼと緒に引まわしてさて其末
の緒をさげ餌袋の口に取そへ血なかし(よいつかハ〳〵そこに当ヲ云)人の前に
成やうに渡候手のこううつむけて餌袋の口を取渡
すべし　請取様の事必レ此渡を是も右の手
にて餌袋の口を是も手のこううつむけ候様に
取て聽て付候次に鷹を渡ける　鷹渡様の事
大緒をほどき候て大緒をさきを右の人さし指に
一まき巻て大緒のさきを手の内に握(ニギリ)かくし
て右のひざのもとのたゝミに手をつきて左のひさを
立て鷹をさし出シ其渡候時請取ル人渡ス人ノ左右ノ
ひさのもとにさしよりて條(フウヲ)さきの方指に巻候を」一ウ
請取候すると仕候時そと又渡す人ひきを引て
礼の心得に仕候を其時ハ猶手をよせ請取候時
渡候　鷹請取様の事右の手にて條(朱)(フウヲ)さきを
取必ニ以前一(朱)人さし指に一巻まきて左の手にて
條をすごきあげて可請取さて其儘渡人の上
座のことくさきへ二足三足ほと引候てひざまづ
き候時先横に置たる鞭を取候て鷹請取人に
渡候渡様ハ腰にさし候方をさきになしてたゝミ
に付て渡候　請取候て鴟ならはたな先の方へ
鞭を二ほとあて其後身よりにあて其次に
尾に鞭をあてゝ尾に鴟ならはたな先より」二オ
身よりさまにあてべし弟鷹ならは身よりからたな
ささまにあてべし鞭のあて様鴟に同たなさ
き身よりのかハり違也

一鷹を人の御めにかけ候時も弟鷹ハ身よりから鞭
をあて、其後たなさきヲ尾さまにあて、尾も
身よりからあて候兄鷹ハ手先より身よりさまにあ
て候尾同前候程鷹のうしろ御らんせんと候ハ、鞭を
尾の下にすけをし上て御めにかけ候御前につなく
ハ後を御めにかくるゝ事幣也不レ可レ□□レ云也
一人に鷹渡候時條かた〴〵ばかり人の前になぎ出して
かた〳〵ハ必二以前一人さし指に一巻まきて渡事あり」二ウ
其時ハなげ出すハとらすして指に巻候を請取べく
なげ出し候を其後取繋候てすごきあげ請取べく候
先なげ出し候を請取候事けがにて候秘事也
一鷹を架につなぎ候時條かた〳〵をばくさり
候てさげかた〳〵にてつなき候時すへ候ハ、先つ
なぎ候をときてさてさげ候を取そへときて居べし
一みどりの架と申ハあがけ山帰りなと夜つなきを仕
候て夜のなかさに成候ての事也空もみどりの色に
成によそへて申す也秘説なり鷹のため夜繋
ハ薬なり巣鷹なとにハさのミこのまずあかけ
山帰りなとハつらひ候時一段吉也」三オ
一餌袋におきへを必さすべしさゝぬハ残外いむ事也
鷹にそへ人に遣候時鈴などハなくてくるしからず
おき餌ハ必さすべき也
一鷹に鈴さし候てハ人に遣ましく候て狩場などにてハ
ふと鷹を人のぬすミなと候ハゝさしながらも可遣候
一餌袋名前の事よめ皮のあたる処をば血ながしと
申長きをの付候結めをは菟頭と申請緒の方
の結めをは鳥頭と申血ながしハよめがハにかぎ
るべからずひきはだにても仕候色革から革なと
にてハ仕ましくまわりの装束の革も黒革
ふすべ革可レ然候
一ゆがけの事ふすべ皮本にて手のこうなどに
紋を付候ハ本儀にあらず同ゆがけの緒の当様ノ事
必レ先ノ二巻まきて手くびにいつものゆがけとめ候様
に三に引そろへて上より下へひねりてさしかい候其
さきを順にゆがけのうちへをし入べし
一主人に鷹渡し可申様之事手にから巻候條
をほどき巻目のさきを前へひねりまハし
もろ手をさしあげて渡申ゆがけなどいさし候
ハずハ先 鷹を我か右にすへゆがけを口にて
くいぬきさて左にすへなをしゆがけを右にて
あをのけにを、いの方を主人にまいらせ如レ前」三ウ
渡候申
一十二の鷹の名の事 弟鷹臺 兄鷹隼
たい せう 鷂 このり つみ ゑつさい 鵤
ふくろう 耳つゝく 以上十二也 ふくろうハ大たかの
守りの心也耳つゝくハ小鷹のまもりの心也鷹
一連と云ハ此十二の事也
一鷹のゆがけ一具と云ハ数十二具を一具と云也
書状などにも十二具を一具と可レ仕也其内ハ
ゆがけ一ッ二ッ十ト云ベシ
一鷹を一もとゝいふに一本と書可然候鷹ハ一本に
一ッより外をらぬ物也其故に本の字能也十二もと」四オ
の時ハ連の字能也十二ノ鷹の名列書ニアリ
一ゆがけハ鷹にそへてハつかふましく候鷹渡候時ハ
請取人さし候て出られたる鷹にさし候て我かゆかけ
をはとりて帰る物にても請取候時ハゆがけをふとこ
ろに入て出口候て聞候て請取刻ふところより取り出
さす物候にて候上る趣き候ぬうちにさし候て出候事ハ
なき事にて候
一鷹にはしをすらせ候事大鷹も鴟も鷹なぶり
のひやくばなを二ノ足の間ニ入てすらせ候小鷹な
どにハもとの方を二ノ足間ニ入てすらせたり能候
一鷹のつぐと云事弟鷹ハ鳥七ッ鴟ハ五ッ取候を」四ウ
つぐと申候

一 小鷹のつゞと申ハうづら廿取候を申ねりひはりハ（鷹鳥ノイマタヲロシ□ウチヲ云）
朝鷹ニ五十夕鷹に五十以上百取候をつぐと申
一 おき縄とハ弟鷹兄鷹にかぎり候て申同ク寸法
の事四十ひろ也小鷹にハいハぬ詞にて候
一 へ緒と云事小鷹にかぎり候て申寸法の事廿一尋（ヒロ）
にて候大鷹にハいハぬ詞にて候
一 さほ姫鷹と云ハ去年ノ若鷹を春取たるを云也
（朱）（定祇發句ニ）佐保姫の鷹やあがけの山ハすれ（ト云）發句モ此心也
一 鷹の鳥座ニ懸置候時ハ山の緒を釘ニ懸候ハ、鴟
の鳥をは下座へ向弟鷹ノ鳥をば上座に向へし」五オ
一 はずハと云ハ藤かづらの土にはひたるを申それにて
鳥をかけ候が本にて候男鳥ハ丸ながら懸候女鳥ハ
うづらをわり候て懸候
一 まるをさし飼候ヲまるをくむと申（男鳥ハ左をくむ也 女鳥ハ右をくむ也）
一 みどりの鞆（タカタヌキ）と云ハ色々うつくしくこしらへたるを云候也
一 田物をいねにてかけ候事水鳥などハいねの数一方ニ
二ッバかり以上ほのきハよりひねりてほのきハを真結（マムスヒ）
に結て手の一束おきて男結にして前より後（ウシロ）ニ
羽がいの下を引まハして後にて又真結に結て切也
又いねのほの方を後に押当て両の羽がいの脇に
いねのさきの成様にかけ候時ハ先のごとくいね」五ウ
をひねりほのきハを真結に結て後より羽がいの下
を前へまハし前にて又真結にしてさて其末を
二寸おきて男結にしてさきを五分ほとおきて切（朱）（ル）
いねのほどハほそく候は、かた〳〵に三ツづゝも能候
鴈（朱）（カン）などハそれにしたがひ六斗も能候鴈（朱）（マガモ）真鴨かけ
様ハ同前たるにて候
一 雉を鳥柴に付候事春ハ柳桜秋ハ楓冬ハ松ニ
付候（朱）（楓ヲ用事畧化也 誤ナル）　松ハ四季共ニ能キよし（朱）（ハ小松の事歟）縋ニ見え候
又柞（ハヽソ）に付候事四季共ニ可然候鳥の付様ハ春ハ一の枝
ナラノ木ノ事
に女鳥を付候二ノ枝に男鳥を付候一の枝とハ本より
一番の枝を申候毎度木の末の枝を一の枝と心得候」六オ
わろく候秋冬ハ一の枝に男鳥を懸候三ッ懸候にて
可レ為二此分候其上ハかけましく候也
一 雉かけ様の事土にはいたる藤をもつて鳥を前より
羽がいの下を後（ウシロ）にまハし（朱）（マムスヒ）真結にして手の一束お
きて男結にして五分ほどおきて一文字に切也女鳥
ハかづらをわりて懸候是ハうしろにての結目女結にして
其さきの結目をばかづらを一ニして片むすひにして
わりたる方よりそき切に五分ばかりおきて切候
一 菟のかけやう左のしりゑだを前枝の上になしかづら
にて二まき巻て又右のしり肢を前肢の上に
なし二まき巻てさて四方の肢のあい二ッづゝ」六ウ
のなかにてうつらをよこがけにして五分おきて切へしくハせ
ハべにじゝを飼へしかいかた面になすへし鷹（朱）縋ニ
ハかけやる又さる日心へし縄にてもかけ候
又云菟ヲ犬なとくいせこなとうちころしたるを尻肢（ば）
を二ッとりくびに引よせうづらにて二巻まきてま
むすびにして一束おきて男結にして五分おきて
切べし前肢ハ二ッ共に外に成様にかくる也
一 大鳥かけ様之事（鷲鵰の事也）懸様ハ縄にて両方の
足を引そろへ一結むすひてどうにまハし真結
にして羽がいの下より前にまハしてさて真結ニ
して手の一束置て又男結にして五分置て」七オ
切べし足をハ腹の下に引付候也
一 鷹の鳥枝にすへ候事へぎのいためにに横（ヨコ）様に鳥
（朱）（ッ）一なればあをのけて鳥の頭をくハせの方の羽がい
に入て鳥の頭御前に成候様に候て可レ懸二御目一
又二ッの時ハ女鳥男鳥共にくわせの方を上に成
様にあをのけて大なり出しき又足付などにすへ候也
懸二御目一様一ット同前一ッ入候事本儀にて候二ッ入候ハ、
へぎを心得てつくらせへく候

一 雁(カン)ハ足付にすへて雉同前に頭の方御前ニ成
候様に懸ニ御目一候
一 鷹の鳥枝に入候いて只懸ニ御目一候時ハ山の緒を」七ウ
右の手にとり左の手にて鳥をかゝへ横さまになしくハせ
の方を御目にかけへく候又かけ候いぬ鳥ハくびを右に
とり左に尾をかゝへ御めにかけ申鶴雁水鳥同(朱)シ
一 犬飼ハ笠をきべき事本儀也山神祭候時ハ犬
かい祭候其時ハ玉女(キヨクネウ)の方に向ひ笠をぬき鳥の
尾の上にあり
上尾下毛を一ツづゝぬきて此哥をとなふ也
笠のはに上尾下毛を手向置て今日の狩場の神祭
つゝ
ととなふへし又別にも色々是あり
一 鷹なぶりと云ハいつもひしやく花の有を云也鞭と云ハ
(朱)藤(フチ)の皮をむかすしてひしやく花をもせずしてうら(ラ)
の方をそぎ切に仕候もとの方も同前也うらと本と」八オ
ちかへて切也いづれも寸法ハ別にしるし置て鷹なぶり
には寸法なし
一 山の緒と云ハ雉をかけ候かづらを云也菟の山の緒と
云も同前雉菟ばかり山の緒と云別の鳥ハ山の緒とハ
いわず
一 鷹の目のふのこきハ目をくうといふ也
一 翌日と云字鷹ニ付る子細有字也鷹の子を立心
と思ふ時母鷹巣の上に夕日朝日などのさしたる
に羽をつかひて子に見すれば子立んととふ心出
来て次日立也されは翌日(朱)ヨクシツとハ羽を立る日と書
候也習(朱)ナラウと云字も同前の物語有と也
一 袖のたぬきといふハ大鷹いぢわろくしてゆかけの」八オ
たを丶いのはづをを取くいなどする時手を少袖の
うちへ引入て平(スエル)を云也又たを丶いのはづれあまりに
出ればひきようなる故引入てすゆるをも云也
一 犬のさばきと云ハはずハの事也一ひろ(朱)ヒトヒロ片すき也同
遣縄と云ハ苧にてないたるを云一丈三尺也三くりにして浅黄ニ□ル
すりのたなハ口傳すなし
一 犬木づな二尺五寸　なりきハ犬いたむ也
一 大鷹を書にだいとばかり書候時ハ臺(タイ)の字能候也
女鳥なる故也御臺(朱)ミタイのたい也此字可然候
一 あがけと申候ハ若鷹をあみにて取たるを云もち
にて取たり共あがけと申也山がへりハ細にてとり」八ウ
たればとてあがけとハ申すましく候て山がへり返にて候若(ワカ)
鷹を冬取たらんハ野ざれにて候巣を出候刻ハ
すまハりたるまし鷹(朱)縡に書しるし是も口傳なく候へ
は事たかいなる事のみにて候
一 子飼の若鷹ハ巣鷹と可申只若鷹とハ云ましく候
世の中ハへしりこたれぬ箸鷹のえそ引きらぬ心よハさに
百度の日次の贄をかけんとて片野禁野に狩声のスル
はう鳥もつかれも立ル犬飼のうちかい袋かろく見えけり
ノソク也
カリノヘヲ也　隼也　ハヤキ鷹也　ハマリアカリ也
のそかへてはやのはたかをはなちやりいとりかあかるそれかあらぬか
一 犬やり声の事ようはう鳥とやり候つかれハよう
つかれと是ハながくやり声申しげくハ声すまじく候」九オ
一 隼にとをる羽と云ハ風にふかれてとまりえぬを云
とをる風共云風ながれ共云
一 鷹狩にせこと申候ハ犬飼にていなくて杖を持にて
犬飼の緒より狩を申候つかれなどの時もたてまハ
して鳥をぬすだゝせぬ様にはしらせぬやうに仕候か
せこの役にて候(朱)公方(クハウ)様の御狩御犬かい衆ハ随分衆めされ候
一 うづらのつかれをばをちと申が能候大鷹仕候時ハ
つかれと申能候雉などハふみたて又一度立候を
バをち共申
一 つかれむかひと云ハ鷹を合候鷹狩犬飼などいま
た行候ハぬうちに草取立て取を云候」九ウ
一 七峯の鈴と申ハ鳩屋(朱)ハトヤにさしたる鈴の事也交(マシ)野

信濃国也

より八重羽墅に飛鳥を取し鷹也次鷹と云も
其時よりはじまりたる也鷹を合て鷹鳥を追
切候時又そこより別の鷹を合次つかひ候を申候
一 あし鷹山の明神とハ諏方の明神の事也
一 若鷹ニ片かへりの毛あるをはすまハりの毛と申候
又餌かけの毛共申候逸物のさう也秘事也
一 さかると云事鷹にきらふ詞にてと立ながらいハで
かなハぬ事ハくるしからす鷹縡(朱)にもきがると云詞(コトバヲヽク)多
書たりくるしからす
一 七鳥(シチ)の内ノ七良鳥をハ木の下と名付ク時鳥ノ事也」一〇オ
一 頭ハまん〳〵としてとハあれたる事也
一 そうわうとハ　まかぐしの事也
一 白毫(ヒヤツカウ)の月あきらかにとハ　目のうしろの事也
一 三四の毛とハ　かたの毛なり
一 しつりの骨とハくもでのきハの四方(ハウ)ニ山かる候処也(又ひぢヲ云ト云一致有)
一 鷹をこのまんにハ鳴さらの鷹をこのめにあり　餌ごいの事也
一 乙女鷹とハ　去年の若鷹ヲ此春取を云(さほひめ鷹と云も同)
一 そば見鷹とハ　何と候らん狩場なりにて鷹きけんヲそん
さしむきわろきを云むつけたるをも云也
一 たもろきとハ鷹の拳(コフシ)にたまらぬを云(しげくとはふ事也)
一 とふさの鳥とハ鷹(朱)縡にハ飛つれて鳥を取をいふと」一〇ウ
あり口傳にハぬくめ鳥の事を云也
はし鷹の拳(朱)(コフシ)の内のぬくめ鳥忍ヲしらぬハ人ハ人かは
一 鳥ノかた鷂(朱)(ミタレトリ)とハ鳥のあとを云とざくり同馬のさくりニ同
一 乱取のたかとハ雁(朱)(カン)など取候鷹也ざうどりの事也
一 あへぎと云病ハ　いきひく事也
一 天竺(朱)(テンチク)　波羅(朱)(ハラ)堤(タイ)国(コク)　鹿野(朱)(ロクヤヲン)薗ト云ハ野也其処にて当
社明神御狩そし始たる処也(朱)さうしやう国の王ハ宮(朱)
山の麓大善道(フモト)(朱)ト云処ヲ狩し給ふされは鷹山
共鷹野共又野をつかふ共山をつかふ共云へし
一 鷹の鳥を肴に出す時ハ時節に随ひ□(四カ)季を
すべし春ハ柳桜などをしくべし秋冬ハ楓松」一一オ
柞(ハヽソ)などを敷へし小鷹のうづらひばりならば荻萩(シヤウクワン)な
との葉を敷べしさてハ鷹の鳥と心得賞翫あ
るべし猶々ゑしやくあるへし三方などのごとくなる物に
入て出す也何に入て出したり共賞翫ハ同前也土(朱)(カハ)
器(朱)(ラケ)などに入ても同前也
一 取飼鳥を本にしやうくわん有へし座ニかけ候共くい
せ鳥ヲ上(カミ)ニ懸候
一 鳥をへぎにすへ候事凡如レ此頸
のかた置人の方へなすべし　【図】
板目横に成べしへぎおしき本也鷹の鳥ハ一ッい
れ候事本儀也二ツ入候ハヽへぎもほど定ル也」一一ウ
頭ハくい口のかたの羽がいに入也(朱)(カモカン)鴨雁まてハ如レ此也
かけたる鳥ハ枝にいれぬ物にて候そき候て入ル物にて候
山の田の(朱)(モ)物(モ)同前
一 小鷹の取候鶉(ウツラ)雲雀(ヒハリ)などを付候荻萩を(ト)ハ鳥
柴(シハ)とハ申すましく候木に付たる雉ばかりの事
にて候鶉雲雀などハ竹に付(朱)(ル)草に付(朱)シもながく始
にて候
一 うつら竹にはさみ候時ハ女鳥をは右の羽をな
かく出候男鳥ハ左の羽を長く出しはさみ候
一 年末の日ハ何事に付ても鷹の事にハ墅嫌申候
一 小鳥を草にてかくるとハ草の葉なとにてハなし
みづひきほどなるかづらにてかけ候(朱)(フチ)藤其外ほそき」一二オ
かづらにて荻萩にかけ候を申候みづひきにてもかけ申候
一 大鷹の餌袋にハ雉の男鳥本也鴟(朱)(ニ)ハ女鳥本也
自然雉なくハ鳥萑などをもさすへし
一 しのぶの澤の水とハ巣山の水也たまり水也古水
なり忍の里の水共申候鷹の一薬也鷹生処の水也
一 西蘭寺殿(朱)慈遠(朱)殿両家ハ鷹の御家也
一 架の本末の仕様ハ座上に本をなすべし
一 大小共に條緒(ヲウヲ)のすへハ手先に結当と云去ながら

大鷹ハ右鴟ハ左に当たるよき也
一 架一ツに大鴟をつぐ時ハ二ッの間当ましく候架
一ツに三共つなく事ハ秘事也ト云々」一二ウ
一 鷹を人に遣候時架を結てつな□候事毎度
あり其時ハ架のたれハ何にても候へつなぎ様ハかハら
すたれにハむかばきひろしき衣類の事ハ申
におよばず左様に候てもつなぎ様ハ替ましく候
ゆがけハ鷹にそへぬ物にて候へ共架に繋渡候時
ハ鞭にむすび付いつものごとく架のさきニ懸置へし
一 取手の指のうちに高き処のいぼのごとく有を疣
ひしぎと云惣その指のうらハ疣うらと云也

架木の事也

一 架ゆひ候時ハ上の木ハ西の方に一文字ニとをして
ゆひ候架衣ハ三ノ幅候てさまに有べし鷹二三もつ
なき候へば横に三ノ幅なるへし」一三オ
一 鷹ハ北向を嫌と云人あり北向本儀也当社明
神北向に御座候ひしやもん天王也北を本とす
鷹の本姓とハ毗沙門を申也
一 装束の時ねず緒の下ニ用ル鳥くきハとぐきと云也
一 足革名前の事
一 鷹に水吹事大鷹ハ右より鴟ハ左より吹也
一 ふくりん白と云ハ毛一ッつ、のまわり白を云也
一 雪しろとハ悉皆白きを云也
一 鼻毛白とハ　はなけ斗白きを云也
一 青白と云ハ　青色也あをさぎ白共云也
一 つま白とハ爪の白きを云也」一三ウ
一 しゆ白とハ眉の毛白きを云　大眉白共云也
一 胸に白き毛の有をは鷺毛共云又鴟毛共云
一 鷹野にてふんたつと云ハ　ふミ立たる鳥の事也
一 たもとかると云ハ　或説ニ秩にいひよするわろしふもと
の事也田本と書也ふもとをかるをたもとかると云也
一 ゆひかけをはいきりがけと云山こゆると云ハ足革の
ゆるくてぬくるを云いきりがけのはづる、事にてハなし
もとをしに付る前の大緒のくけ革をばしたぐけと
云也寸法ハ手の一束也もとをしのきハを架またげト云
一 鞭わたりと云ハ鷹を座敷に置て鞭にてなぶり
こぶしにもあがり候時口餌をくハせなとしてなつ」一四オ
一 くる也さいはらひにてなつくるも同前也
一 餌の事萑つばろなども皮をむきて飼事能候
とやこめ候時ハむかずしてかい申候
一 すんゑとハいつものより少ふとくつくるを云也
一 鷹の毛つくと云ハほゞけてわろき事也鳥の毛なと
の付ほとなるを云也持人むさくと持候へば如レ此有也
一 雪の朝なと鳥のあとをつなぐをはとざくりをつ
なくと云とざくりをもとむる共云也
一 かた塩と云薬ハ金を塩むしたる塩よき也かハらけ
共にこにして飼也又本に焼事猶々秘事也別にし
るす口傳あり」一四ウ
一 肉を只ひき候をはなかじ候と云也をのづから引たる事也
一 ぢやうすへとハいわず帯ずへと云也
一 鳴ハかしらをかハぬ物也をのかしやくしといひて御賞翫の
物也包丁の秘事也鶉雲萑以下の小鳥ハ頭を飼
又鸞のをのかくしざしと云事長きすね也是も
一 包丁の秘事也
一 鞭ゆがけと架にかけ候時ハ弟鷹ハ身よりに懸兄鷹
ハたなさきに懸候餌袋をは又一方の架の爪に
さし入て置てたぬきに同
一 鳥屋と云ハこむるを云雀ハ鷹べやと云可然候也
一 こづちの緒ハひごの緒と云長き能候尾をつかふと云也」一五オ
一 架名に外架内架樋架とあり外ほこハ外ニ
つなく架也内架ハ鷹べやの架其外家の内の
架迄也樋架と云ハ書御生の架也ひをつき候
なり小指のせいほど架の上どをりを長クなりて
あい革のあつくやはらかなるにてぬいく、み候也鷹

足氣わつらひ候時足のうら架にあたらぬ様の書
生也又日に向て繫(朱ツナク)をも日ぼこと云也
一 つみさしばとハ大鷹の心也さしばの大なるをいふ也
一 ゑつさいさしばとハ鴟の心也さしばのほそきを云也
一 春さしばとハ春き毛ふのさしは也
春の墅にまがへる程の春さしばあがらさりせはおちを見ましや」一五ウ
一 ゑつさいといふハいたりてほそくたてにふをきる也
ふやこをもまだくいのこすゑつさいのどこの程にて鶉と候らん
一 かたうつらとハ一ツの事也是ハおぎはぎに付候也はぎ
に付候時ハ羽きハをしんに付候也様判別にしるし
置也
一 鶉あまたの時ハ竹にもはさミたるが能候おぎはぎ
などにも付候事さのミあまたハいかゝ云ながら萩など
ハ可然候鷹の取候ハぬ雲萑などハ竹にあまた懸候事
もあり又はさみ候事も候さやうに候て人に遣候が能候
かけ候物ハ水引たり候へて小鷹狩にハ水ひきをして
もたする物にて候いとのやうなるかづらにても懸候(いとにて懸候ト申ハかづたにて候)
一 大鷹の鳥をかけ候にハ鳥柴(朱トシハ)に三懸候時ハ春」一六オ
ならは女鳥一枝(朱ノ)男鳥二枝又女鳥三枝と懸候二ッ
男鳥候ハゝ二三の枝男鳥たるに男鳥二にて候
女鳥二にて候とりかい鳥とたゞの鳥と懸候時ハとりかい
とり一の枝たるにて候去ながら春ハ女鳥一ノ枝たるへし
一 大しらミ(朱)小しらミ(朱イワウ)薬之事　丁香(朱)　黄壁(朱カウヘキ)(朱カウラケ)土器(朱)
由粉(朱)硫黄(朱カシラクヒコシ)　右等分に合て鷹の頭頸腰の上
ヲシロイ
も、の付もと尾すけ脇ニ可レ付毛をせん時付
べし又其儘鷹なぶりにて毛をぬらしよしのほ
そきにて吹入候が能候也
一 鷹主鷹なノせうべんヲ餌にひたし飼候きらすハせう
べへん也
一 石上の極水(朱コクス井)万病国といふ山陰に日のあたらぬ」一六ウ
在所の石の上にたまりたる水薬也
一 なつけ薬に山河山澤にあるかにを丸ながらたゝ
きて餌につゝミてかふ也
一 むさうかんの事なつけ薬いれ薬に可レ飼也夏
と候秋はなし真虵の肝ヲかけぼしにして黒焼ニして飼也
一 よるとる澤の水とハ月水の付たる紙也こまかに
きざミて餌にませて飼也せうべんの水にひた
してしるにて餌をしろ(ママ)しても飼也是ヲ染紙共
云又うす紙共云也
一 から竹の水とハ真竹(マタケ)の切かぶにたまりたる水也諸
病(ヒヤウ)に吉也」一七オ
一 きりの水木草のはに置たる露也諸病ニ吉也
一 きりつほの水竹の切口のたまり水也
一 こつほの水惣薬也秘事也
一 はづのこしらへ様紙につゝミて板にあてへらにて押
候へはあぶら出候也能候あぶらを取てさて抹ッする也
一 どりうの黒焼とハうづらもちの事也黒焼ニする也
一 ぶくりうかんとハかまの下にてよく焼たる赤出也
一 魚目(朱ウヲノメ)養生の事　ま小たの(朱)ヨ　きわたのやうじにて
上をまハし候へは則ぬくる也其説にまわたの(朱)ヨヲ
入候へはやかて直る也
一 百草五月五日ニ百草取て焼かまのすミをも用」一七ウ
一 しんふんきやうとハ厚朴の事也
一 ひるも草田さハなどにあるひるむしたつの事
一 ほしことハ　いりこの事也なまこにてする也
一 山まめも野まめも飼也
一 だんじとハすいはらの事也鷹ニ霧上一の薬也
一 鶏のいがきざかとハかふとの事也(朱ニハトリ)
一 鷹をく声の事大鷹ハおう〳〵と喚也小鷹ハほう〳〵
と喚也隼ハゑい〳〵とをく也さしばハけう〳〵と喚也
一 爪のぬけたるにハどりうの霜を付候水にてぬらして
付候
一 夏角(朱ナツツノ)とハふくろ角の事也

一なまりとハ銀(朱シロカネ)を吹なまらかしせんくづのごとく細シテ飼也」一八オ
一尾のいきとハ尾のくきの事也
一露草とハうつしの事也はながら共云草の事也
一赤いばらとハこまかなる実(ミ)のなるいどろ(ママ)也
一羽かき鷹とハ羽のふしのちがひたるをいふ也
一ひぼねとハ胸よりくたりける骨のくそ袋のさかいを云
一くそ袋の間を身なし腹といふ
一くるみも、の木のやうしをハくるみの木桃木のはしにて炙スル也
一松ほと云ハ伏苓の事也
一あさノをとハ萑かくれのひかげぼしにして用
一子もちむしろとハ子もちのせうへんのかちたる蓬事也
一からすうりのねとハくわつるこんの事也」一八ウ
一ねこの霜　黒ねこよし
一たけりとハ春子を生時分せ骨ニ子の様なる物あり
一ろくぜう　鹿の角の事也
一あせぼとハ　よなはなの事也犬のこせにも能也
一大ざいはい飼とハさいへいのごとく切かけ〳〵したる餌の事也取分隼によし
一くたりけとハ肉をたゞびきに引をいふ也
一きりかふとハ犬飼を筋あぶら共に身につくりそへて飼を云也
一栗鼠(朱リヅス)のかしらのだいにハいたちの頭を用へし
一二からげばかりと云ハ大豆二斗なり」一九オ
一やうばいとハ山も、の事也
一まわたとハ目のうちに白きかハのミゆるを云也
一まわりの羽とハかたのまハりの毛ヲ云
一くわどん草とハからすうりの事也
一七千余の毛とハ惣の毛の事也
一ぶくしんとハ荏苓の中ヲ草の生とをりたるを云
一ほうその木とハこ、その木の事也(ならの木共云 はさこ共云)
一目にくいの立たる薬(クスリ)山立花の落葉をそとむして葉のごとく少あぶりてうすにて引てかうがいのみ、二ツはかりつ、ミて飼(餌ニ)べし目ニ入候にハ葉を霜してかミのあぶらにて入候小児ののミ候乳(チ)をもあぶら」一九ウにおきまぜて餌に入候いづくにくい立候共彼霜をあぶらにてとき入候へはやかて〳〵ぬくる也土龍の霜も能候
一からむしとハ山(朱ソ共云)をの事也其根にやハらかなる処あるなり其をそくいのごとく押也
一鷹鶻にふまれたる時病(朱ヤム)に土龍の霜水にてとき付に候て内にハ蓬のみどりをもミたるにて萑の身をそくひのやうにをしてそれを餌につ、ミてかふべし又蓬をもミて其しるを茶碗に入(朱レ)候てしばし置候へはとき候を竹のへらにて落(朱シ)候てかう事も候」二〇オ

菟見口傳

一あけびづるの事皮をこそげて粉にして皮薬ヲ等分にあハせて飼へしあハせ薬本書にあり
一飛あいぎとハ飛ていきひく事也(あへきと斗モ申 いき引事也)
一おほこのからくそとハ　かいこのくそなり
一はしぶとの鳥の霜も夏ハわろし秋冬春よし
一かわほねとハ黄なる花のさく水草也
一山鳥の事当社御きらひ候故鷹にハとらせ候へ共諏方の家内にハいれず候
一小鷹にかしはミと云ハかし鳥を取候て足なとくはれたるヲ云
一むしの小じらミの事わくもとも云
一どうけの薬の事架の木にせきしやうを切まぜ」二〇ウてとうふんにして煎飼へし餌などくい候ハねはとて飼候へは軈てよく候秘事也
一あて餌といふハ野などに仕候すると思る、二日前にいかにもいつものごとく餌をつくりあらひ候て大餌にかひ候てなかつかい候すると思ひ候ハんする今日餌をつくり湯のかんをちとあつく手ひきがんに

仕候て餌に入候へは餌の血うき候トき□□（はしカ）に候てふり
すゝぎ〳〵取あげ候てしぼり候てかふ也最上の
秘事也
一　鳫の鷹につかミつき候時ハからすのひぢのふし
をつよくひねれは指をのへ候秘事也」二一オ
一　外架に鷹をつなぎ候時ハ先鷹をつなぎ其
次にゆがけをぬぎ鞭にゆひ付鞭置架の前の
方に成候やうに架にかけ候さて餌袋をとき
架さきにかけ候（朱）さしたるもよし
一　鷹つなぐふし数大鷹ハ五節鴉と小鷹ハ三節
にて候
一　鷹の身を何てにもかきやぶりたる時ぶくりうかん
を水にてときて付へし内にも飼也餌もち
なと自然破れたるにハからいとにてぬい候て此薬ヲ
付へし土龍の霜もよし鸛鷺につかれふ
まれたるにも是を用最上の秘事也
一　しぎの飼様候事羽の左うらを飼事先ハ本也」二一ウ
又はしをあけ口のなかよりなうを飼也是ハ秘事也
無余儀取かい度いかやうにかうへし
一　鷹の足革にハなまげしをすりていづミずにて
付候又くまのいを水に出し候へは昔へに出候それを
何にてもよく候
（朱）明應五年丙辰壬二月吉日　（朱）前信濃守　（朱）神東通
（朱）其預安藝守鑑員
（朱）法名鉄叟道牛（花押）
（朱）周藤吉良
（朱）統綱（花押）」二二オ

本稿は、科学研究費補助金（基盤研究C、課題番号24520247、研究代表者　中本大、研究課題「放鷹文化と鷹書類の研究」）による研究成果の一部である。
（長野県短期大学　多文化コミュニケーション学科　日本語日本文化専攻）
（〒380－8525　長野県長野市三輪8－49－7）